80

江戸医学館蔵書集散の顛末

小曽戸　洋[1)]，天野　陽介[1)]，町　泉寿郎[2)]，星野　卓之[1)]
[1)]北里大学東洋医学総合研究所，[2)]二松学舎大学

かつて江戸医学館には多数の和漢医書が収蔵され，考証医学の研究成果を生む資となった．その蔵書集散の現在に至る経緯について考察したので報告する．

医学館は明和2年（1765）多紀元孝による神田佐久間町の躋寿館の創立に始まる．寛政4年（1792）官立の医学館となったが，文化3年（1806）の大火に類焼．蔵書は灰燼に帰した．以後，医官らの献納により書籍が集められたが，多紀本家（元簡・元胤）の聿修堂蔵書が最も多かった．『聿修堂蔵書目録』所載書がそれで，天保4年（1833）には幕府へ献上という形をとり，褒賞金が下賜された．文政11年（1828）には毛利高標佐伯侯の蔵書が幕府に進献（紅栗斎本），医書数百帙は医学館に分納された．天保14年（1843）には多紀分家（矢の倉）の元堅蔵書（存誠薬室本）のなかから医学館に重複しない漢籍医書の善本100部875巻501冊が献上された．このほか現物入手の叶わぬ善本医籍については八方手を尽くして探索し，精巧な模本を作り収儲につとめた（紅葉山本，半井・竹田・吉田・福井・上杉・仁和寺ほか）．ここに至って医学館の蔵書は完備した．

明治元年（1868）幕府崩壊によって医学館は医学所に収属され種痘館となった．蔵書は明治5年昌平黌や和学講談所の蔵書とともに文部省下，東京湯島の書籍館に入り，明治7年には浅草蔵前八番堀に移転．翌8年には内務省下，博物館所属の浅草文庫として公開された．その目録に『博物館書目』がある．昌平黌と医学館蔵書の一部は大学東校を経て明治10年東京大学図書館に入り，大正12年の震災で焼失したとされるが詳細不明．浅草文庫は明治14年に閉館．蔵書は内務省の和田倉門書庫に移り，明治17年，太政官文庫の創立によってその管理下となった．医学館旧蔵書もこのとき同文庫に納まったが，一部は内務省から明治14年農商務省の所管となった博物館に分割．博物館は明治19年に宮内省所管となり，帝国博物館，東京帝室博物館を経て，戦後東京国立博物館となった．森鴎外が大正6～11年，帝室博物館総長在職中に記した『帝室博物館書目解題』には医学館旧蔵書の若干部について言及がある．なお昭和32年刊の『東京国立博物館蔵書目録（和書2）』には医学館旧蔵書は含まれていないようである．

太政官文庫は翌明治18年内閣制度の発足により内閣文庫と改称．明治44年からは皇居大手門内に置かれ，昭和46年には北の丸公園に新設された国立公文書館に併合され今日に至っている．医学館本は紅葉山本，昌平黌本などと総括し，「医」の記号を付して『内閣文庫漢籍分類目録』（昭31）と『同国書分類目録下』（昭50）に収載されている．前書の医書の部は長沢規矩也の指示のもと石原明が作成した．

明治24年，内閣文庫収蔵の和漢古書40余万冊のうち，とくに貴重な書が選りすぐられ，宮内省図書寮に移された．当時の移管書目に『公文類聚第14編巻17・古文書仮目録』があり，医学館旧蔵書も少なからず含まれていた．昭和初期には博物館から宮内省への医書移管も数度にわたり行われている．戦後，図書寮は諸陵寮と統合して宮内庁書陵部となり現在に至る．目録は『宮内庁書陵部和漢図書分類目録』（昭和30）があり，医書は漢籍国書を混載．医学館旧蔵書には「多」の記号が付される．医書で「毛」の記号を付す毛利佐伯本も医学館の架蔵であったと思われる．

今回，内閣文庫，宮内庁書陵部，東京国立博物館の目録類と，『躋寿館医籍備考』（明9）ほか江戸時代の関連旧目録を照合し，同定作業を進めたところ，大ざっぱに見積もって医学館旧蔵本は，①内閣文庫に7割近く，②宮内庁書陵部に約1割，③東博に1割弱が現存するかと推定された．残り1割強は行方不明，散佚か．事実，台湾故宮博物院の楊守敬旧蔵書，あるいは他所にも医学館旧蔵書の所蔵を確認しうる．江戸医学館にはおよそ2千部（点），万余の冊数に上る医書が収蔵されていたとみられるが，今後さらに詳細について検討作業を進めたいと考えている．